

中国古典に見る「敬天愛人」

矢 澤 秀 昭

はじめに

中国の古典に於いて「敬天愛人」の四字を同一箇所に見ることができる文献は無い。

中国古典の熟語を広く網羅する諸橋徹次編『大漢和辞典』（大修館書店）に於いてさえ、それは「西郷南洲の語」とある。西郷隆盛がこの四字成語を好んで揮毫したのは一八七五年頃である。

スマイルズ著『自助論』の翻訳である中村正直の『西国立志編』（一八七一年刊行）の訳者緒論に「必ず学明らかに、行い修まれるの人なり、敬天愛人の心ある者なり、己に克ち、独りを慎む工夫ある者なり」とある。中村正直はこれ以前にも一八六八年に「敬天愛人説」を唱えている¹⁾。

『康熙字典』等を編纂させたことで有名な清の康熙帝（在位一六六一～一七二二年）が、扁額に「敬天愛人」の四文字を書いてキリスト教会に与えたのが一六七一年である。

「敬天愛人」の出典は諸説ある。本論はこれの典拠を明らかにしようとするものではない。また、西郷隆盛がどのような経緯で「敬天愛人」を唱えたかを探求するものでもない。「敬天」、「愛人」などの連語、もしくはそれに関連する語句が中国古典に於いて、どのように現れ、扱われていたかを考察しようとするものである。

一 解字

「敬天愛人」各字の字義、成り立ちを確認する。

敬

『説文解字』²⁾に

敬肅也、从支苟

とある。「敬肅也」が敬の字義を解釈している。即ち敬は肅（つつしむ）であると。「从支苟」は字体の成り立ちを説明している。从は「従」の源字。支と苟を合わせた会意文字である。支は「急迫」を表し、苟は「いましめる」を表す。合わせて「はっとして身を引き締める」から「つつしむ」の意となった。

「うやまう」の意は、『周礼・天官・大宰』³⁾に

二曰敬故

とあり、〈注〉に「敬故不慢旧也」（敬故とは旧をあなどらいこと）⁴⁾とある。また『荀子・強国』に

王者敬日

とあり、〈注〉に「敬謂不敢慢也」⁵⁾（敬とはあえてあなどらないことをいう。また『墨子・経説上』⁶⁾に「礼貴者公、賤者名、而俱有敬慢焉」とあり慢は敬の反義語として用いられている）とある。中国古典では敬は「つつしむ」、「うやまう」の意で広く用いられている。

天

『説文解字』に

天顛也、至高無上、从一大

とある。「天顛也、至高無上」で字義を解釈している。「天顛也」（天は顛である、「顛」は「いただき」、「てっぺん」を表す）と「至高無上」（これ以上に高いものは無い）から「そら」の意としている。「从一大」で一と大を合わせた会意文字であることを表している。そらは至高でありその大きさは並ぶものはなく唯一であるから、一と大を合わせた。また、大の字に立つ人の上の平ら部分を一で表したものと指事文字とする説もある。

『史記・太史公自序』に

命南正重以司天（南正重官名に天の観測を命じた）

とある。ここでは天は天体を表している。

『礼記・王制』⁷⁾に

天謂日也（天とは日のことをいう）

とある。ここでは天は太陽を表している。

『論語・陽貨』に

天何言哉、四時行焉、百物生焉（天は何も言わなくとも、春夏秋冬はめぐり、鳥獸草木は生じている）

とある。ここでは天は自然の摂理を表している。また神などの創造主をも彷彿とさせる。

『孟子・離婁章句上』に

順天者存、逆天者亡（天にしたがうものは存立し、天にさからうものは滅亡する）

とある。また、『莊子・天道』に

先明天而道德次之（天を明らかにすることが先で、道德はその次）

とある。儒家と道家の違いこそあれ、ここでは天は自然の道理を表している。

『爾雅・釈詁』⁸⁾に

天君也（天とは君である）

とある。ここでは天は君、王、帝を表している。

『詩経・鄘風・柏舟』に

母也天只

とあり、〈伝〉⁹⁾に「天謂父也」とある。ここでは天は父を表している。

『儀礼・喪服伝』¹⁰⁾に

父者、子之天也、夫者、妻之天也

とある。ここでは天は父であり、夫を表している。

他にも天には運命、天性、大きいなどの意で用いられている例がある。

愛

源字は「𢇇」。『説文解字』に

𢇇 恵也、从心无声

とある。「𢇇 恵也」（𢇇は恵である）で字義を解釈している。即ち愛は恵（いつくしむ）であると。「从心无声」で形声文字であることを表している。心で大まかな意味を、无で読み方を表している。古くは𢇇、𢇇、𢇇、𢇇の字体がある。『広雅・釈詁』¹¹⁾に

愛仁也（愛は仁である）

とある。仁愛の情を表している。「めでる」、「きにいる」、「このむ」の意の例は古来より多数ある。

人

『説文解字』に

人 天地之性最貴者也、此籀文象臂脛之形

とある。「天地之性最貴者也」で字義を解釈している。即ち人は万物の霊長であると。「此籀文象臂脛之形」で字体の説明をしている。籀文（大篆のこと、小篆（篆文）の前身）では人のひじ（臂）とすね（脛）をかたどっている象形文字としている。人の立った姿を側面から見た形である。「人」は人間のことであり、他人、人民、目下の者などの用例があるが、いずれも「人」を表すものであり、他の特殊な用例は殆ど無い。

二 連語举例

「敬天愛人」の四字から二字が連なった例を見てみる。

敬天

敬天之怒、無敢戲予 『詩經・大雅』

故万物之所宗、必敬天而事地 〈成公綏、天地賦〉

『詩經』の例は「天の怒を敬う」と読める。〈疏〉¹²⁾に「天之怒者、謂暴風疾雷也」とある。つまり「天災」のことである。特に「敬天」二字の連なりを意識したものではない。成公綏の賦は「天を敬う」と読める。この「敬天」は文中に於ける動詞と目的語の関係であり、連語や熟語ほどに二字の結びつきが熟成したものではない。

敬愛

敬愛而致恭 『荀子・君道』

修恭遜敬愛 『管子・小称』¹³⁾

天下懷樂敬愛、願以為君主 『戦国策・秦策』¹⁴⁾

この三例の「敬愛」はいずれも「うやまいつくしむ」ことを表している。「敬愛」の例は『魏志・韓暨伝』¹⁵⁾、『晋書・王濛伝』¹⁶⁾等にも見える。前の語が後の語の修飾語となっている連語である。ある程度熟語として扱われたのではないかと考えられる。

敬人

仁者愛人、有礼者敬人、愛人者、人常愛之、敬人者、人常敬之 『孟子・離婁章句下』

畏天而敬人 『孔子家語・弟子行』¹⁷⁾

この二例の「敬人」はいずれも「ひとをうやまう」ことを表している。『孟子』、『孔子家語』とも動詞と目的語の関係であり、熟語として扱われていたとは考え難い。

愛人

人之愛人、求利之也 『左氏・襄公三十一』¹⁸⁾

君子之愛人也以德、細人之愛人也以姑息 『礼記・檀弓上』

節用而愛人、使民以時 『論語・学而』

君子学道、則愛人 『論語・陽貨』

仁者愛人、有礼者敬人、愛人者、人常愛之、敬人者、人常敬之 『孟子・離婁章句下』

この五例の「愛人」はいずれも「ひとをいつくしむ」ことを表している。いずれの例も動詞と目的語の関係であり、熟語として扱われていたとは考え難い。

愛敬

愛敬尽于事親、而德教加於百姓 『孝經・天子章』¹⁹⁾

(『呂覽・孝行』にも同じ文章が見られる)

蜀人愛敬、至今称焉 『漢書・王吉兩龔鮑伝』

飛愛敬君子、而不恤小人 『蜀志・張飛伝』²⁰⁾

この三例の「愛敬」はいずれも「いつくしみうやまう」ことを表している。「敬愛」と同様にある程度は熟語として扱われていたと考えられる。

天愛

孝発幼齡、友自天愛 〈陶潜、祭従弟敬遠文〉

この「天愛」は「生まれ持った情愛」を表している。「天」は「天性」を表している。用例はこの陶潜のものしか見られない。

天人

羽人飛奏樂、天人跪焚香 〈王維、過福禪師蘭若詩〉

画堂授傳姆、天人親捧持 〈杜牧、秋娘娘詩〉

汝陽讓帝子、眉宇真天人、虬鬚似太宗、色映塞外春 〈杜甫、八哀詩〉

順時貢職、入覲天人 『晋書・庾貞伝』

初見仁出皆懼、及見仁還、乃歎曰、將軍真天人也 『魏志・曹仁伝』

不離於宗、謂之天人 『莊子・天下』

「天人」の例は多数ある。王維と杜牧の詩では「仙人」のような天上界の者を表している。「天人」の多くはこの意で用いられている。杜甫の詩

では「美人」を表している。『晋書』の例は「天子」を表している。『魏志』の例は「優秀な人物」を表している。『莊子』の例は「道を修めた人」を表している。いずれも熟語として扱われていると考えられる。

人天

粒食伊始、農之所先、古今攸頼、是曰人天 『旧唐書・音楽志』²¹⁾

天為人君、君為人天 〈劉禹錫、砥石賦〉

人天道殊、卑高定分 『魏志・釈老志』

『旧唐書』の例は「食物」を表している。劉禹錫の賦では「君子」を表しており、「天」は人の上にあるものである。『魏志』の例は「人と天」を表している。「人天」の用例は少ない。

三 連語解釈 「敬する」ことと「愛する」こと

「敬天」の例が少ない。特に、中国古代思想の中心とも言うべき儒家の〈経書〉に用例が無い。『詩経』の例はあるが、これは「天の怒を敬う」のであって「天」のみを「敬う」対象としたものではない。また『孔子家語』の他にも『孟子・梁恵王下』に

以小事大者、畏天者也

と「畏天」の用例があり、「天」は「おそれる」ものであって、「敬う」対象ではなかったのであろう。一の解字で示したように、「天」は空、天体、太陽、自然の摂理・道理などの意で用いられ非常に広義である。それは「人」の上にある存在で、人が「敬う」ものではなく、おそれ従うものな

のである。『礼記・楽記』に

樂敦和、率神従天

と「従天」の例が見られる。「敬う」ものは「人」でなくてはならなかった。人以外のものや動物が「敬う」対象となった例は見られない。人である「君」を対象とした「敬君」の連語は見られない。連語ではないが『孝経』に

敬其父則子悦、敬其兄則弟悦、敬其君則悦臣

とあり、「君」は「敬う」対象であることを示している。しかし、「敬王」の用例は見られない。「敬人」の他に「人を敬う」例として、

「敬賢」（賢者を敬う） 敬賢下士、樂善不倦 『漢書・谷永伝』

「敬師」（師を敬う） 弟子敬師之道 『礼記・曲礼上』

「敬親」（父母を敬う） 敬親者不敢慢於人 『孝経・天子章』

「敬老」（老人を敬う） 敬老慈幼、無忘賓旅 『孟子・告子下』

などの例もある。

また、儒家の尊ぶ仁や徳を「敬う」例は無く、「敬仁」、「敬徳」の用例は見られない。しかし、

「敬義」 敬義立而徳不孤独 『易・坤』

「敬礼」 其見敬礼如此 『史記・汲黯伝』

「敬礼」 王賀雖不遵道、然猶知敬礼 『漢書・王吉伝』

「敬礼」 茂復為太子大傅、甚見敬礼 『魏志・涼茂伝』

「敬信」 賞罰敬信、民雖寡強、賞罰無度、国雖大兵 『韓非子・飾邪』

「敬忠」 季康子問、使民敬忠以勤如之何 『論語・為政』

などの例は見られる。

「愛（愛する）」（いつくしむ）の対象は如何。二の举例で示した如く、「人」を「愛する」例は多い。「敬愛」、「愛敬」も「愛（する）」と行為としては同様であろう。「愛人」の他にその対象となるものは多岐に及ぶ。以下に例を挙げる。

「愛親」 愛親者不敢惡於人、敬親者不敢慢于人 『孝經・天子章』

「愛友」 兄弟三人、特相愛友 『顏氏家訓・兄弟』²²⁾

「愛君」 鬻拳可謂愛君矣 『左氏・莊十九』

「愛民」 天之愛民甚矣 『左氏・襄十四』

「愛主」 忠国愛主、小心翼翼 『晋書・范陽王虓伝』

以上は「人」が「愛（する）」対象となったもの。「敬君」の用例はないが、「愛君」、「愛主」の例はある。

「愛国」 周君豈能無愛国哉 『戦国策・西周策』

「愛山」 木落天晴山翠開、愛山騎馬入山来 〈白居易・宿西林寺詩〉

「愛酒」 天若不愛酒、酒星不在天 〈李白・月下独酌詩〉

「愛馬」 不若愛馬者 『墨子・經説上』

以上は「愛（する）」対象が人以外のものである。他にも「愛花」、「愛月」、「愛石」、「愛泉」などの例がある。「愛（する）」対象は広範であり特に限定されていない。しかし、「愛天」の用例は見られない。やはり「天」は「愛（する）」対象ではない。「愛（する）」対象は「人」以下のものである。

四 「敬天愛民」 結語に代えて

国語において二字以上の漢字からなる熟語が、熟語であると認識することは容易い。しかし、表記には全て漢字を使用する中国語、就中古典ではそれと判断することは存外困難である。中国語は単音節言語である。則ち中国語は一音節が一つの「言葉」になっている。漢字はその「言葉」を文字化したものである。現代でも基本語彙は一音節であることが多い。名詞に於いては二字以上の連語は、古典より現代まで多数ある。動詞に於いて二字連語となるためには、「敬愛（敬愛する）」のように修飾語と被修飾語の関係であるもの、「接近（接近する）」のように同義もしくは類似した語を重ねたものなどは古来より連語として扱われていたと考えられる。しかし「愛人」（現代では「愛」は「人」の修飾語、いつくしむ人の意から「配偶者」をさす）のような本来動詞と目的語の関係であるものは、古典では連語となりにくい。同様な関係であっても「結婚」（現代では「結婚する」という一語の動詞）のような前後の結びつきが強いものは、連語として扱われていたと思われるものもある。『後漢書・梁皇后紀』に

結婚之際、有命既集

という例がある。「敬天」の例は連語、熟語と考えることは難しい。現代

でも「敬天」の二字熟語は無い。

「四面楚歌」（日中とも同義で使用）などの四字成語は、古典由来の四字成語であり、古典では文中の一部分にすぎず、それが成語として意識されたものではない。後代に四字成語として扱われているのである。

「敬天愛民」の四字を同一箇所に見ることができる例がある。

及問為治之方、則対以敬天愛民為本 『元史・釈老伝・丘処机』²³⁾

陛下嗣位以来、非不敬天愛民 『明史・王竑伝』²⁴⁾

の二例である。いずれも「敬天愛民」を四字成語として意識していると思われる。中国の古典としては、比較的年代的に新しい。この「敬天」は「天子を敬う」ことである。これ以前の古典には見られない用例である。そして、清朝となって康熙帝は「敬天愛人」を扁額に揮毫した。

参考文献

佩文韻府

段注説文解字

大漢和辞典

康熙字典（新版横排標点注音簡化字本 北京師範大学出版社一九九七年）

漢語大詞典（縮印本 上海辞書出版社二〇〇七年）

十三經注疏 詩經 論語 孟子 礼記 儀礼 周礼 孝經 易經 春秋左氏伝

爾雅

荀子

管子

墨子

広雅

戦国策

史記

漢書

三国志 魏志 蜀志

旧唐書

元史
明史
莊子
韓非子
顔氏家訓
後漢書
唐詩選

注

- 1) 沢田鈴藏・増村宏「中村正直の敬天愛人」、鹿児島大学法文学部史学地理学教室、鹿大史学 19号 1972年 参照
- 2) 書名。後漢の許慎の著。最古の部首別漢字字典。
- 3) 書名。十三経の一。『儀礼』、『礼記』とともに三礼の一。周王朝の制度について周公旦が書き残したといわれている。なお『』の中は『書名・編名』を表す。
- 4) 『十三経注疏』の注。後漢の鄭玄による。
- 5) 唐の楊倞の注
- 6) 書名。兼愛と非戦を唱えた墨翟の思想を著したもの。
- 7) 書名。五経の一。周末から漢にかけて古礼に関する説を儒学者が集めたもの。
- 8) 書名。十三経の一。中国最古の辞典。撰者不明。
- 9) 前漢の毛亨・毛萇が伝えたという『詩経』のこと。
- 10) 書名。十三経の一。『周礼』、『礼記』とともに三礼の一。儀式、法制などを記したもの。戦国時代の作と考えられる。
- 11) 書名。字書。魏の張揖の撰。
- 12) 『十三経注疏』の疏。注である。唐の孔穎達による。
- 13) 書名。法家の書。管仲の作と伝えられているが、実際は異なるとされる。
- 14) 書名。戦国時代、縦横家の策略を国別に集めたもの。漢の劉向の編。
- 15) 魏の史書。晋の陳寿の撰。『三国志』の中の『魏書』の通称。
- 16) 晋代の史書。
- 17) 書名。孔子の言行や門人との問答を記録したもの。今に伝わるものは、魏の王肅が注を加えたものとされる。
- 18) 書名。十三経の一。『春秋左氏伝』のこと。『春秋』（孔子が魯国ことをきろくしたもの）の注釈書で左丘明が伝えた。
- 19) 書名。孔子が門人の曾参に述べた「孝」を曾参の門人が記録したもの。
- 20) 蜀の史書。晋の陳寿の撰。『三国志』の中の『蜀書』の通称。

- 21) 唐代の史書。五代後晋の劉昫らの撰。
- 22) 書名。南北朝時代、北齊の顔之推が子孫へ記した訓戒。
- 23) 元の史書。明の宋濂、王禕らの撰。
- 24) 明の史書。清の張廷玉らの撰。